

セツルメント史概観

—その誕生から日本における実践まで—

川上 富雄

《本論の要旨》

セツルメントは、労働者教育の系譜と貧民教化事業の系譜が結実した実践として1800年代後半にイギリスではじまり、世界的に拡大した実践である。我が国には1890年代以降紹介され、社会事業家により実践が始まっている。本論では、先行研究を辿りながら、その経緯をまとめるとともに、役割や機能を分類整理した。なお、本論は、我が国セツルメント実践や思想が、戦後、社会教育と社会福祉に分離し、公民館活動と社会福祉協議会活動および在宅福祉サービス活動に継承されているのではないかとの仮説のもと、セツルメントの歴史を辿りなおしながらコミュニティオーガニゼーションおよびコミュニティケアの原型を探ろうとする作業経過報告であり、結論の導出には至っていない、いわば研究ノートである。

《英文要旨》

A settlement practice began in the UK in the late 1800s as an integrated practice of workers education and projects of relief for the poor. And it has spread worldwide in a flash. It was introduced to Japan in the 1890s and has been put into practice by social entrepreneurs. In this paper, I traced previous research, summarized its history, and classified and organized its roles and functions. This paper examines the history of settlement based on the hypothesis that Japan's settlement practices and ideas were separated into social education and social welfare after the war, in particular, it has been inherited by community center activities and social welfare council activities. This is a work progress report to be retraced, and no conclusions have been drawn yet, so it is a research note.

《キーワード》

セツルメント 隣保館 コミュニティオーガニゼーション コミュニティワーク

《英文キーワード》

Settlement Community organization Community work

はじめに

セツルメントは、労働者教育の実践と貧民教化事業の取り組みが結実し生み出された実践といえる。S. バーネット (Samuel Barnett) が、1884年にオックスフォード大学関係者の協力によりトインビーホールを設立したことを起源に、短期間に先進国中に拡大した。1890年代以降には我が国にも紹介され、隣保事業として普及することとなる。

大林宗嗣は、『セツルメントの研究』(東京・同人社1926年)において、セツルメントは「社会運動から発生して後に社会事業の性格を帯び来り、現今に至って再びそれは元の社会運動への復帰の傾向を示しつつある一つの社会教育的運動となった」と概観し、その性格として、社会理想主義の名を以て知識階級文化や有閑階級の市民的文化を労働者階級に押しつける注的的活動ではなく、人間的生活に必要な科学的知識を獲得する機会を与える開発的社会教育であらねばならないと述べている。これは、地域住民の抱える様々な生活問題に対して、施与的援助ではなく主体形成を図り自立を促す支援を行うソーシャルワークの理念に通底するものであるといえる。さらに大林は、その主体形成の方法において「教育」が大きな比重を占めており、セツルメントを「直接国家の支配を受けない自由教育」とし、「隣人の交際によって彼等の社会生活の完成を期」する「小社会の仕事(コミュニティ・ワーク)」であると説明している。このことは、大林自身が述べているように、地域住民に働きかけ主体形成をはかるコミュニティワークを中心としたソーシャルワークを、戦前のセツルメントが実践していたことを物語っているといえる。

本論は、我が国セツルメント実践や思想が、戦後、社会教育と社会福祉に分離し、公民館活動と社会福祉協議会活動および在宅福祉サービス活動に継承されているのではないかとの仮説のもと、セツルメントの歴史を辿りなおしながら主体形成をはかるコミュニティオーガニゼーション(コミュニティワーク)およびエンパワメント志向のコミュニティケア(在宅福祉)の原型を探ろうとする研究の一部である。なお、本論の段階では、予備的作業としての先行研究レビュー・資料整理をした研究ノートであり、原著論文としての仮説検証や新しい知見提示をするものではないことをお断りしておく。

1 セツルメントの誕生とその価値・方法・機能

(1) セツルメント前史1 ～労働者講習所～

ロバート・オーエン (Robert Owen 1771-1858) は、ウェールズに生まれ、紡績事業の成功により若くして大資産家となった。労働者教育や協同組合運動を通じた社会改良に熱心であった。オーエンは、1816年にセツルメントの先駆ともいえる人格構成学院 (Institute for the Formation of Human Character) を設立した。これは労働者教育機関であり、1800年前後の英国では宗教団体を中心として類似の労働者教育活動が取り組み始められていた時期である。例えば、1789年にバーミンガムでは牧師が日曜学校を拡大し労働者教育協会を設立し成人日曜学校 (Adult Sunday School) を始めたが、後にバーミンガム労働

者講習所 (Birmingham Mechanic Institute) 設立へと発展する。また、1817年にはクラクストン (Claxton) によってロンドンに労働者講習所も設立され、1823年にはトマス・ホジスキン (Thomas Hodgskin) もロンドンに労働者講習所を、さらに同1823年に、グラスゴー大学でアンダーソン教授の労働者教育を継承していたバークベック (Birkbeck) もロンドンに労働者講習所を設立した。

その後、労働者講習所は「各種の社会運動の中心となり、又労働者教育の機関として其の後続いて設立された多くの労働者講習所の発生を促す動機を与えた」¹。リバプールやマンチェスター等へも波及し、1850年までに622箇所の講習所が設立されたとされている。しかしその後は、経済上の都合などから労働者が減少し、商人、俸給生活者、会社員等の中産階級者層がこれに変わるようになり、その本来の目的から次第に離れていった。

(2) セツルメント前史 2 ～チャルマースの隣友運動～

トマス・チャルマース (Thomas Chalmers 1780-1847) は、スコットランドの牧師であり、隣友運動 (Neighborhood Movement) の創始者としても有名である。彼は牧師として赴任した教区人口約15000人の町グラスゴーのツロン (Tron) 教会において、全く教会に来ない3分の1の人びとの理由を「(一) 彼の個人的感化が彼らに及んでいない事、(二) 彼等に対する●(文字判読不能) 的監視の足りない事、(三) 教区組織が欠けている事」と分析した上で、その対策として「(一) 其の教区を二十個に分類し、各小区に一個宛の教会を新設し、(二) 其の隣友事業を十分に成し遂げる為に市当局者と協力し、(三) 其の費用を主として市当局より支出を仰ぐ事」²とし、市当局もそれを受け入れ事業に着手し始めた。しかし、その矢先である1819年にチャルマースは同市セント・ジョーン教会に異動することとなり、そこにおいてもまた同様の隣友事業を開始した。

セント・ジョーンでは、「教区を二十五区域に分割し一小区域には六十個から百個までの家族があった。之等の小区域はそれぞれ教会の長老や執事が担当して、彼等教区民の精神的又は物質的欠陥を満たし、チャルマース自身は全教区を通じて戸別訪問をなし、又家庭集会、人事相談、窮乏扶助等の仕事の一切によって出来るだけ個人的の接触に努めた。それと同時に他方に於いては労働者の子弟教育の為に二つの学校を設立して四人の教師を任命し、それぞれ初等教育を施さしめた」とされている。チャルマースがセント・ジョーン教会に赴任した時の教区に要する市の共助費は年1400磅 (ポンド) であったものが、労働者の職業教育による自主独立の生計を鼓舞した結果、4年後には年280磅までに減少したとのことである。市当局に新しい救助申請があった場合には、執事がその調査を行い、出来るだけの努力を払って彼等の自活の道を講じた。こうすることによって、執事等はその担当区域の貧民の生活状態に関するより実際の知識を得ることが出来たとされている。この、教会執事は今日でいうところの民生児童委員的な役割を担っていたと考えることができよう。

(3) セツルメント前史 3 ～チャーチスト運動と基督教社会主義運動～

チャーチスト運動は、1838年から1848年の10カ年にわたるイギリスの民衆運動であるが、その直接の動機は労働者階級の選挙権獲得の運動であったと言われている。特に、1832年の選挙法改正により中産階級の商工業者に選挙権が付与されたことに伴う無産階級の反感・反発に基づく運動であった。

チャーチスト運動の主張は、「(一) 成年男子の普通選挙権獲得、(二) 平等なる選挙区、(三) 議員の毎年改選、(四) 議員資格の財産制限撤廃、(五) 無記名投票、(六) 議員に俸給を与ふる事」であった。その急進的な共産主義活動はしばしば暴動騒擾を伴い、やがて首脳者の逮捕や解散命令などを招くこととなる。³

しかしながら、チャーチスト運動は基督教社会主義運動との連携を強め、貧窮無学の労働者階級の現状に対する宗教的情熱の発露として社会教育活動へと軸足を移していく。その中心的担い手はバーミンガムのオニール・ジョン・コリンズ (O'Neil John Collins) やヘンリー・ビンセント (Henry Vincent) 等であり、労働者階級の風紀、道徳、知識の向上に努めた。基督教社会主義は、資本主義の不当を説き、労働者階級の地位の向上のために社会主義と基督教的博愛を支持する立場であり、その中心人物としてフレデリック・デニソン・モーリス (Frederick Denison Maurice 1805-1875) およびチャールス・キングスレー (Charles Kingsley 1819-1875) 等が挙げられる。

キングスレーは、1819年デヴォン州ダートモアに生まれ、ケンブリッジ大学を卒業後、ハンプシャー州エヴァースレイ教会の牧師となり、その後約30年に亘ってこの地で過ごした。キングスレーはチャーチスト運動の目標は評価しながらもその運動の過激さに反発を持っていた。1848年4月ロンドンのケニングトン広場で起こったチャーチスト運動の集会が擾乱化したのを見てキングスレーは擾乱沈静のためにビラを作り配布した。

モーリスは、1805年に教会牧師の子としてサフォークのノルマンストンで生まれた。ケンブリッジ大学卒業後、教育雑誌主筆、オックスフォード大学教授を経てリンコルン・イン教会の牧師となる。その傍ら、1848年にロンドンに女子大学クイーンズ・カレッジの設立に参加し、その後教授に就任したが、宗教上の意見の相違から同職を解かれたのを機に1854年に労働者大学 (Working Men's College) を設立し自ら初代校長に就任した。モーリスが労働者大学設立に取り組んだのは、労働者講習所 (Mechanic Institute) やそれに倣ってシェフィールドに設立された人民大学 (Peoples College) に影響をうけたためといわれている。

モーリスの労働者大学の講師として参加した識者の一人に、文学者であるジョン・ラスキン (John Ruskin 1819-1900) がいた。ラスキンはロンドンに生まれオックスフォード大学を卒業後、著述活動の傍ら労働者階級の福利のために様々な取り組みに参加した。ロバート・オーエンと類似していると言われる彼の主張は、第一に、「全国を通じて政府の費用を以て、政府の管理の下で、年少者を訓練すべき学校を設立」し、義務教育制を導入

すること。第二に、「全く政府の管理の下で向上波に製作所を設立し、あらゆる生活必需品を精算し且つ売却すること。第三に、成年少年男女は適切な仕事に就いて一定の賃金を得ることができ、無知により仕事ができなければ教え、病気で仕事ができなければ療養させること。第四に養老救貧制度を設けること、であった。⁴

(4) セツルメントの誕生 1 ～大学延長教育と労働者教育・貧民救済の融合～

大林は、「セツルメントの第一歩は大学延長講演 (University Extension) から始まっている」⁵ とその起源を規定している。それは大学の講義を聴講する特権を一般大衆にも拡大する事業であり、モーリスの労働者大学に強い影響を受けているものである。この取り組みはケンブリッジ大学のジェームス・スチュアート (James Stuart) 教授が 1867 年にロンドンの労働者等に大学の講演を行ったことが最初と言われている。1872 年以降はケンブリッジ大学の制度として延長講演が位置づけられた。その後、オックスフォード大学も 1878 年からロンドンで講座を開くようになった。

エドワード・デニソン (Edward Denison 1840-1870) は、オックスフォード大学で法律を学び、卒業後は政治家を志していたが、1960 年代の社会運動・労働運動の思想に共鳴し、1866 年にロンドン窮民救済協会 (London Society for the Relief of Distress) に参加し、ロンドン東貧民窟 (east End) を受け持ち、社会改良事業に携わることとなった。その活動の中で「之等のパンと肉の施与は只だ救貧税に就ての仕事を行なっているだけであり、且つ全く無効である。私の見解に依れば、此の協会及び他の多くの回の主なる用途は、上流階級に属する極めて多くの人々をして彼等の同法市民の不幸と实际的接触をなさしめる事であり、おして彼等に社会改革の必要性を認めしむる事から成り立っている。」という考え、つまり、「彼等を救ふ途は彼等に物資を施す事ではなくして自活の途を与ふる事」であるという考えに至った。これは従来の協会の物資施与的な援助方針に異論を唱えることとなり、その対立から 1867 年には協会を出てステプニーのフィルポット街 49 番地に移転し新たな活動を始めることとなった。その事業内容は、貧民窟の人々に住居を与え宗教家や篤志家と隣人の交わりをなすことによって漸次改善を図ろうとするものであった。デニソンの活動に共鳴した牧師であり歴史学者であったジョン・リチャード・グリーン (John Richard Green 1837-1883) が援助し、また、ラスキンも人道主義の実現を求めてデニソンの事業へ参加することとなった。

デニソンとグリーンは、植民園を作って大学延長事業を行うことを思いつき、1868 年に大学生の一団が貧民窟 (スラム街) への入植を始めることとなった。大学延長教育と労働者教育がここで繋がったといえる。デニソンはその 2 年後 1870 年に没するが、彼の功績を大林は「デニソンは初め貧者救済から出発し、後にその自活の途を与へ、ついで労働者教育、労資協調、労働者団体組織と云ふが如き方面に進んだ」⁶ と評している。

デニソンが始めた大学セツルメントの先駆は、ケンブリッジ大学時代からの友人であっ

たエドモンド・ホーロンド (Edmund Hollond1841-1900) に受け継がれ、ラスキンの援助も継続された。

ホーロンドは 1869 年に組織的慈善救済及び乞食予防協会 (Society for Charitable Relief and Repressing Mendicity) の設立者の一人でもある。この協会は翌年慈善組織協会 (charity Organization Society) に改称している。これがロンドン COS の発端である。

(5) セツルメントの誕生 2 ～S.バーネットを中心に～

サムエル・バーネット (Samuel Burnett1844-1913) は、ブリストルに鉄鋼業者の子として生まれた。オックスフォード大学卒業後、ロンドンのプライアンストン・スクエアの聖マリヤ教会においてウイリアム・フレマントル (William H.Fremantle) 牧師の補助牧師に、後に正牧師となる。1872 年にはロンドンで最も貧困層の多いホワイトチャペル地区の聖ユダヤ教会へ移り、そこでセツルメント活動を本格化させる。彼は先ず「従来の救貧事業を改革して、彼等に独立自治の道を与ふる社会教育の機関」を設立した。教区学校を建設して昼夜を問わず貧民に開放し、婦人教育のための組織をつくり、子弟の学校を設け、衛生施設とともにあらゆる施設を整備していった。またこうした貧民窟の現状をケンブリッジ大学やオックスフォード大学へも訴え、様々な形の協力を仰いだ。そうした活動の中、1874 年に盟友となるアーノルド・トインビー (Arnold Toynbee1852-1883) と出会った。トインビーはオックスフォードの学生時代から同教授であったラスキンに伴われ、諸奉仕活動に参加する中で社会改良に強い関心を持ち、後に教員になってからも慈善や救貧とは一線を画した実践活動～労働者教育と協同組合～に傾倒していった。

トインビーは 1852 年に外科医ジョセフ・トインビー (Joseph Toynbee) の第二子としてロンドンに生まれた。彼は、初めは軍人を志望し 14 歳にして士官学校予備校に入学したものの、文官へと志望を変え 16 歳でロンドンキングス大学 (Kings College) に入学し 18 歳で法律家の資格を得たものの精神上の不安に襲われ、それを解決するために歴史および歴史哲学の研究を始めた。1873 年 21 歳にしてオックスフォード大学ペンブローカレッジ (Pembroke College) に入学した。その後、バリオルカレッジ (Balliol College) 歴史科へ転校した。1875 年には同大学の講師に挙げられ、さらに 1878 年には学士号を得て学生監 (Tutor) に任ぜられた。

トインビーがオックスフォード大学の学生だった時、美術教授であったラスキンは、同大学の学生に労働の意味を体験させるために希望者を募って近隣の道路の改修を行っていた。そうした活動への参加を通じてトインビーは労働者の実生活に関心を持ち、慈善事業や救貧法に不満を抱くようになる。1875 年の夏、ホワイトチャペルのバーネットの事業を援助したことをきっかけに、そこに居住することとなった。いよいよ「貧困」の問題に直面する中で、貧困の原因の多くは、労働者が無知な状態に置かれているためであり、労働者教育の必要を悟った。それと共に彼等の現状を救うには彼等と「協同」して自活の途を

開き「協同組合」の手段によってその生活難を救助するという考え方に至り、「協同組合者の教育」を著した。しかしながら、その後まもなく1883年に生涯を閉じることになる。

トインビーの死後、その遺志を受け継いだオックスフォード大学の多くの学生達は、すでに1875年以降大学教育延長倫敦協会 (London Society for the Extension of University Teaching) を設置し活動していたケンブリッジ大学の学生らとともに、セツルメント事業建設の為に学生・教授に寄付金を募集し、1884年聖ユダ教会の隣地を購入しトインビー館を設立した。

その後、セツルメントは英国内に急速に拡大する。トインビーホールに遅れること数ヶ月には、オックスフォード館 (Oxford House) がオックスフォードのベツナル・グリーン (Bethnal Green) に (1884年)、1887年にはオックスフォード・ケンブリッジ両大学の女子学生により「女子大学セツルメント」 (The women's University Settlement) がサウスウォーク (Southwark) に、1890年には清教徒の青年達によってマンズフィールド館 (Mansfield House) がロンドン郊外のカンニング町 (Canning) に、同年には、ハンフリー・ワード (Humphry Ward) 夫人がユニテリアン教会の後援を受け、大学館 (University Hall) を開設した。1891年には、ウエスレアン派の信者達によってバーモンジー・セツルメント (Bermondsy Settlement) など、ロンドンを中心に多くのセツルメントが設立され、労働者教育活動も活性化した。

(6) セツルメントのアメリカへの拡大

アメリカにおける最初のセツルメントは、アマースト大学 (Amherst College) 卒業生のスタントン・コイト博士 (Stanton Coit) によるものといわれている。コイトは、同大学卒業後1885年ベルリン大学で研究中に、トインビーホールで活動していたハワード・ブリス (Howard S. Bliss) を通じてセツルメント事業を知り、ベルリン大学で学位取得後の1886年正月よりトインビーホールに居住してこの事業を研究した。翌年には米国に帰り、フェリックス・アドラー博士 (Felix Adler) の「倫理文化協会」 (Society for Ethical Culture 1876～) の助手として成年教育事業に携わった。この事業への参加と並行して、コイトはニューヨーク市の東側町フォーサイス街に部屋を借り、近隣の交流活動を活性化させる事業に着手する。生年立ちとのピクニック、OIF (Order, Improvement and Friendship) クラブの組織化、幼稚園の開設、婦人クラブの設立、少女クラブの開設などを行い、これを「隣友組合 (Neighborhood guild)」と呼んだ。隣友組合運動は、賛同者等⁷によりニューヨーク市内に拡大していった。

また、シカゴのジェーン・アダムス (Jane Adams) は、ロックフォード女子大学 (Rockford College) 卒業後、医術を持って貧民救済事業に当たろうとしていた。人の薦めで暫く海外漫遊をすることとなり、欧州の社会状態を視察中にトインビーホールの噂を聞き、学友であったエレン・ゲート・スター女史 (Ellen Gates Starr) とともにトインビーホールを

視察した。彼女は、シカゴに帰るや否や 1889 年にシカゴのホルステッド街の貧民窟に空家屋を借り、ハルハウス (Hull House) を立ち上げた。ハルハウスの由来は、この家の最初の持ち主であった Charles J. Hull の名前を取ったものといわれている。ハルハウスには図書室を設け隣人の利用に供し、また、音楽や技芸の教室を設けた。

他にも、コイトは、1891 年「隣友組合、社会改善の機関」(Neighborhood guild; An instrument of Social Reform) をロンドンで出版した。また、ロバート・ウーズ (Robert Archey Woods) は、6 ヶ月間のトインビーホールでの研究を「英国の社会運動」(English Social Movement 1891 年) として発表紹介し、これによってセツルメントの意義や性格が広く米国社会に理解されるようになった。1890 年代には、本場イギリスを凌ぐ多くのセツルメントが創立されることとなったと言われている。

(7) 英国における「定住セツルメント同盟」と「教育的セツルメント協会」

トインビーホール以降、イギリスには 60 を超えるセツルメントが設立され、その多くが次のいずれかの連盟に所属したとされている。一つは「定住セツルメント同盟」(Federation of Residential Settlements) であり、もう一つは「教育的セツルメント協会」(Educational Settlements Association) である。前者は定住業者を必要条件とするもので、後者は定住業者を必ずしも必要とせず、また救済事業を必要とせず、専ら成人の社会教育に取り組むセツルメントである。

「定住セツルメント同盟」は、「セツルメントとは思想の交換をなす事から生ずる友誼を造る場所である。セツルメントが持つクラブ、学校、社交会の如き形式的の制度は相互の理解と同情から自然に発達するものである」⁸ という立場に立ち、定住者という立場同士でのセツラーと住民の人格的交流や感化に重点を置いている。しかし、必ずしもそれだけにとどまるものではなく、「定住セツルメントと雖も教育的事業をなしているのは極めて普通であって、トインビー館の如きはその代表的のものである」⁹ としている。

因みに、「定住セツルメント同盟」に所属するトインビーホールの創設者でもあるバーネット婦人 (ヘンリエッタ) は、第 1 回国際セツルメント大会において「其時 28 歳の私の良人と、また 21 歳の私は、1873 年に此の家の隣の小さな牧師館に住むやうになった。～(中略)～全部が犯罪者、悪漢、墮落者の住宅であった。～(中略)～そして之等の墮落した人々を向上せしめる問題が普通の方法ではいけなかったので、～(中略)～そこで吾等は二つの原則に依って仕事を始めた。～(中略)～壇上からものを投げ下してやるのではなく、肩と肩を並べて床の上に立って分けてやること—それが第一の原則であった、そして第二も亦それに似ている。友情を創り出すこと」¹⁰ であるとセツルメント活動の活動原則を披露している。

「教育的セツルメント協会」は、「セツルメントが従来考えられたやうに労働者貧民階級への知識階級の植民と云うが如き思想を排して、セツルメント自身が隣友と協同

して其の地域の利益を保護し且つ増進すると云う一個の自発的行為を創造すること」である。これに必要なものは、「適当な場所と、適当な指導と、有力な協力」¹¹である。そして、この事業中で最も重要な位置にある人は「舎監」であるとしている。舎監は、個人との友誼的關係を造り、各種団体相互關係の構築を推進する技術を持ち、広い同情を有し、最高の教育理想を有し、大学の優秀なる人材を選び普通人の日常生活に接近せしめる才能を持つ人でなければならないとしている。

2 我が国におけるセツルメントの拡大と価値・方法・機能

(1) 公立隣保館の評価と民間隣保館

大林は、セツルメントに必要な条件として、「(一) 斯業者が全き一個の友人として其の隣保に対して人格的接觸をなし、(二) 絶えず其の隣人の福利の爲めに物質的に精神的欠乏を補給し、(三) 其のコミュニティに定住又は仮住する」と三つを挙げ、これを、我国のセツルメントに当てはめ、物質的補給に偏った当時のわが国の公立隣保館に対し、その条件を満たしておらずセツルメントの名義を与えられないと断じている。「第一赤裸々の友人たる資格で個人的接觸をなすには官吏或は市吏たる肩書はいらぬ事になる。さうするには其の肩書に依ってこれを行っている官設又は市立の事業は此の第一の条件に相当しない。又事実について欧米では官設又は市立(或は公設)のセツルメントと云ふが如きものはない。よしんばそれがセツルメントの事業に類似した仕事を為しているにせよ之をセツルメントとは呼んでいない」¹²と公立によるセツルメントは、欧米のセツルメントとは似て非なるものであると指摘しているのである。

そして、「次に又其の隣人の物質的或は精神的欠乏を補給しているにしても其処に補給者と被補給者との間に、施与者对被施与者感情、又は優越者对卑下者感情等の背景的感情なくして之等がどれ丈の友誼的態度で行われているかも亦疑問である」と、公立隣保館において援助關係における両者の感情や態度が対等性をたもてるのかと疑問を呈している。さらには、「又コミュニティに定住し、或は仮住し一即ち一定期間だけ居住して之を行っているか否かも亦我国のセツルメントに於いては問題となり得る」と指摘し、公立隣保館はこれらの条件を精選して見るならば、厳正な意味でセツルメントとは言えないとしている。一方で、むしろ民間の活動こそセツルメントの条件を満たしている実践を見いだせるとして、下記のようないくつかの例を紹介している。

有隣園……東京府豊多摩郡淀橋町柏木に明治44年に大森兵蔵が設立。幼稚園、児童遊園、児童図書館、児童クラブ、夜学校、英語学校、土曜会などを実施。

三崎会館……東京市神田区三崎町に大正14年開設。児童遊園、商工徒弟教育および慰安、人事相談、女中教育等を行う。

愛染園……大阪府南区下寺町に大正6年設立。貧民の徒弟教育を主として、託児所、幼稚園、人事相談、課程訪問、日曜学校等を実施。

イエス園……神戸市葺合新川に大正8年設立。日曜学校、無料診療、訪問指導、人事相談、慰安事業等を実施。

マハヤナ学園……東京府北豊島郡西巢鴨町で大正8年創設。仏教主義に依って託児所、夜学校、日曜学校、児童図書室、柔剣道、青年クラブ、女子クラブ、人事相談、無料宿所、巡回産婆等の事業を行っていた。

（2）セツルメントの事業

大林は、セツルメントにおける活動を次の7つの事業に大別している。①教育、②修養、③クラブ、④家財的施設、⑤社会事業的施設、⑥慰安及び娯楽、⑦研究調査、である。¹³ 以下、大林の説明を要約紹介したい。

①教育

教育事業は、普通教育と特殊教育の二つに分類される。普通教育は、公立学校に通うことの困難な貧困世帯の子弟のために行われる教育であり、幼稚園または小学校以上の教育を提供する取り組みである。特殊教育には、家庭科学、市民教育、産業教育、芸術教育などがある。家庭科学には裁縫、刺繍、編物、仕立業、手工、料理、諸細工、タイプライティング、速記術等がある。市民教育としては、アメリカで取り組まれている外国移民に対する米化運動や異人種間の融和事業なども含まれるが、一般的には法律一般、司法行政に関する一般的知識、日常の家事経済、社会道徳、都市問題等である。産業教育とは農工商業に関する初歩的な知識を与えることである。芸術教育は労働者の知識向上および趣味涵養や品性陶冶に資する目的で取り入れられている。

セツルメントにおける教育の特徴は、教育者—学習者両者間の人格的個人的関係を通じて展開されるものであり、学習者の私生活に立ち入ってまでもその完成を期するものである。さらに、単なる貧者への市民的文化の注入ではなく、事実に関する科学的知識を獲得させることにあり、無知の状態からの脱却を期してもいる。

②修養

修養には、身体的修養と精神的修養がある。身体的修養は肉体の鍛錬を目的とした運動遊戯、旅行並びにスキー、蹴球、野球、漕艇、庭球、卓球、スケート、水泳、マラソン、柔道、剣道、撞球、相撲、登山、遠足等の諸種競技がある。精神的修養は、講話、演説、静座、読書のための図書館、巡回文庫、少年義勇団、修養のための諸集会等がある。

③クラブ

クラブは、単に社交的本能を満足させる娯楽的施設であるばかりでなく、人類の社会生活をなすための一種の修練場である。社会的な存在である人間の価値を見出す場として、意図的に作られる小社会、コミュニティである。年齢による分類では、少年クラブ、青年クラブ、成人クラブ、老人クラブなどがある。性別によるものでは、少女クラブ、婦人クラブ、老女クラブなどがある。また場所によって、隣人クラブ、田舎クラブなどもある。

④経済的施設

経済的施設とは、労働者地域住民の経済的支援に関する諸事業である。職業に関しては、職業紹介、授産事業、職業指導等があり、衣食住に関しては日用品実費供給、簡易食堂、衣服改善、住宅改良、公設浴場、理髪店経営等があり、金銭上の支援では、貯金奨励、小資金の融資等があり、人事に関しては、人事相談、法律相談、独身婦人寄宿舎等があり、後援事業としては、小作人組合後援、労働組合後援等がある。

⑤社会事業的施設

社会事業施設には、大きく分けて母性ならびに児童保護、社会衛生施設、教化事業の三種類がある。母性ならびに児童保護の事業としては、妊産婦保護のための宣伝活動や施設の運営、巡回産婆、産院的施設、妊産婦相談、保育施設、児童相談所、児童検査、児童慰安娯楽施設、託児所、児童保養所、児童遊園施設等がある。社会衛生施設としては、牛乳検査および配給、救療世話および診断、施薬、心理相談、体格検査および健康相談、巡回看護および出張診断等がある。教化事業としては、矯風事業、禁酒、廃娼運動、巡回講話、映写会などがある。

⑥慰安および娯楽

慰安娯楽事業には、訪問によるものと施設で行うものがある。訪問先としては、家庭、病院、学校、諸団体がある。施設で行うものとしては音楽会、合唱団、懇親会、演劇、舞踏、活動写真、競技、遊戯、ピクニックなどがある。

⑦研究調査

トインビーホールやハルハウスなどでは、一部門を設けて専門的に社会問題に関する調査研究を行っているが、一般的なセトルメントにおいても新たな事業を開始するときにはその予備的手段としてきわめて必要となる。

(3) 戦前の社会事業におけるセツルメントの位置

音田正巳は、わが国のセツルメントを、第1期（1890年代～第一次世界大戦まで）、第2期（1918年（大正7年）から1930年（昭和5年）まで）、第3期（1931年（昭和6年）の満州事変から第二次世界大戦まで）、第4期（1945年（昭和20年）以降）の4つの時期に区分している。¹⁴

第一期 創生期	1897 (M30) ～ 1918 (T7)	日本における資本主義の勃興期であり、セツルメントの創生期に相当する時期。
第二期 発展期	1918年 (T7) ～ 1930 (S5)	日本における資本主義の爛熟期であり、セツルメントの全盛期に相当する時期。
第三期 衰退期	1931 (S6) の満州事変～1945 (S20) の第二次大戦終了まで	ファシズムの台頭期であり、セツルメントの衰退期に相当する時期。
第四期 再生期	1945 (S20) 以降	政治・経済・社会の民主化の時期であり、セツルメントの再生期に相当する時期。

（「わが国セツルメント事業の回顧と展望」大阪社会事業短期大学社会問題研究会『社会問題研究第8巻第2号』）

第1期（第一次世界大戦まで）は、日本における資本主義の勃興期であり、セツルメントの創生期に相当する。この時期は、1897年（明治30年）の片山潜が児童保育と労働者教育に力を注いだキングスレー館の設立、1891年（明治24年）のA.B. アダムズ（Alice Betty Adams 1866-1937）による岡山博愛会（日曜学校、小学校、保育所、診療所）、救世軍大学殖民館（1908年、東京）、有隣園（1911年、東京淀橋）、三崎会館（1915年、東京神田三崎町）、暁明館（1915年、大阪四貫島）、救世軍愛隣館（1915年、東京下谷および本所）、愛染園（1917年、大阪日本橋）などの数施設にすぎない。しかも、これらのセツルメントがすべてキリスト教徒の手によって設立され、キリスト教精神によって経営されていたということは、わが国の初期セツルメントに対して、いかにキリスト教が大きい影響を与えていたかを物語るものとしている。

第2期（1918年（大正7年）から1930年（昭和5年）まで）は、日本における資本主義の爛熟期であり、セツルメントの全盛期に相当する。この時期は、インフレーション下の混乱とともに始まる。この時期における社会不安は第一期に見られないような高潮に達した。1918年の米騒動を契機に、政府が積極的に貧民救済に乗り出しただけでなく、財閥も多額の寄付金を提供した。また、第5回全国社会事業大会（1920年）において、労度運問題解決の補助手段として労働者を対象とするセツルメントを設置すべきであるとの決議がおこなわれてもいる。さらに、1923年（大正12年）に関東大震災が起り、1927年（昭和2年）には金融恐慌が起り、その2年後の1929年には世界恐慌に襲われ、1925年現在で「下級労働者の集団居住地区と目されるる不良住宅百戸以上集団せる地区を調査すれば、箇所数217、居住者約31万人」に及ぶと報告されている。そしてこの時期にこれらの地域に対して、約40のセツルメントが設置されたとされている。しかもその大部分は東京と大阪に設けられたものである。

この時期に設立されたセツルメントの特色は、キリスト教徒によって設立されたもののほかに、それよりもはるかに多くの公立セツルメントが設立されたことと、わが国最初の本格的な大学セツルメントとして東京帝国大学セツルメントが設立されたことである。音田は、わが国において公立セツルメントが設立された背景を、「日本人の間において社会連帯の観念が乏しく、市民の手による地域社会の教化改善が行われにくかったことによるものである。しかしそれとともに、国家が当然に社会政策として実施すべき労働立法と社会保障とが実施されず、その代替物として公立セツルメントが設立された」と分析している。この時期に設立された公立セツルメントの代表的なものは、1921年（大正10年）に大阪に設立された大阪市立市民館で、このセツルメントは明らかに米騒動に刺戟されて、大阪北部の貧民地区に設立されたものであって、わが国最大の規模を有するセツルメントである。

第3期（1931年（昭和6年）の満州事変から第二次世界大戦まで）は、ファシズムの台頭期であり、セツルメントの衰退期といえる。1930年代の資本主義の危機を契機として、先進資本主義諸国と後進資本主義国との進路は分かれた。英・米・仏などの先進資本主義国は福祉国家への道を歩み始めたのに反して、日・独・伊の諸国はファシズムへと突進していった。セツルメントは民主主義の土壌の上には生育することはできるが、全体主義の土壌の上では難しく、枯死するほかなかった。そうした時勢の中で、多くの社会主義者を生み出した東京帝国大学セツルメントは、1941年に解散に追い込まれる。1938年（昭和13年）には、全国に約230のセツルメントが存在したと報告されているが、実際の活動は戦時動員のために生じた社会関係の歪を是正することに集中された。とくに、この時期におけるセツルメントの増加の大部分は農村セツルメントとあってよい。軍隊と工場への動員に伴う農村の労働力不足と生活の窮乏化対策として整備が進んだのである。

第4期（1945年（昭和20年）以降）は、政治・経済・社会の民主化の時期であり、セツルメントの再生期に相当する。しかしながら、第2期のようなセツルメントの全盛が見られるかという点、かならずしもそうではなかった。都市部に集中していたセツルメントの多くは、戦前の全体主義の中で解散に追い込まれたり、戦争によって甚大な被害を蒙って壊滅してしまっていた。また、戦後のインフレーションによって基本財産を失ったものも多い。かつてのセツルメントの中で生き残ったものは、国家の委託を受けて保育所や養老院を経営する社会事業施設にとどまっているのが大部分である。

音田は、戦後は戦前型のセツルメントがそのまま復興したのではなく、「わが国では同一の地域社会における社会福祉活動の担当機関は二つの別々の法律によって規定せられている。すなわち、公民館は1949年の社会教育法によって設立せられ、社会福祉協議会は1951年の社会福祉事業法によって設立せられ」しかも「前者は文部省の所管であり、後者は厚生省の所管となっている。この結果、同一地域における社会福祉活動が二分せら

れ、折角の社会資源が十分に活用されないことがしばしば起こっているのである」と、セツルメント実践が戦後は「社教—社協分理」されたと解説する。

一番ヶ瀬康子は、「日本セツルメント史素描」(『日本女子大学紀要』第13巻1964)において、先に紹介した音田正巳の我国におけるセツルメント時期区分を援用しながら、その歴史を独自の視点から整理している。

たとえば、第1期のセツルメントの創生期のなかでも、生江孝之や三好豊太郎らがわが国最初のセツルメントと評するA.B. アダムズの岡山博愛会(1891年)や、大林宗嗣がわが国最初のセツルメントと評する有隣園(1910 東京府豊多摩郡淀橋町柏木)などは、労働者との連帯で民主主義的組織を形成しようとはしておらず、単なる慈善事業であったとし、労働者の存在を意識し社会改良的意識をもったセツルメントの誕生は片山潜のキングスレー館であるとしている。

そして、第2期の発展期には、セツルメントは三類型に分かれ始める。それは「宗教的セツルメント」「公立セツルメント」「大学セツルメント」である。三者の特徴は次のとおりである。「宗教的セツルメント」は、アメリカのセツルメントの形体すなわち社会事業のデパートメント・ストア的な性格を持ったものである点が特徴的である。したがって、その社会改良的意図はその背後に隠され、キリスト教、仏教それぞれの宗旨と布教の目的が先行し、慈善事業的性格が抜けきっていないまま形体的模倣のもとに発展した。「公立セツルメント」は「擬似セツルメント」であり、「生活問題対策に労資調和の理念をうちたて、社会主義、共産主義予防の手段として積極的にのりだしてきた国家の方策のひとつ」であり、「社会的救済事業」と「教養向上的事業」を提供するコミュニティセンターであったと評する。「社会的救済事業」とは、健康相談、保健訪問、診療、保育、保育、託児、法律相談、人事相談、職業紹介補導、質、資金貸与、信用組合、母子収容、授産所、などである。「教養向上的事業」とは、学校、雑誌発行、子供会、親の会、クラブ、図書室、夜間娯楽、遊園、土曜会、各種集会などがある。公立セツルメントの性格の曖昧さについては当時から種々の議論がなされていた。「大学セツルメント」は大学拡張運動であり、もっともセツルメントらしい出発をしたが、労働運動、社会主義運動とのかかわりの中で次第に圧殺の道をたどることとなる。

第三の衰退期は、昭和恐慌から世界恐慌の中で、国民生活不安が深刻化した時期である。他の先進資本主義諸国と同様に、失業者の増大や生活困窮者の続出、一家心中の増大等を受け、方面委員の取り扱い件数も激増し、政府も恤救規則に代わり救護法を1932(S7)年漸く施行するにいたる。こうした中で、公立セツルメントである市民館が、無産階級の「妨貧のための教化」に一役買っていくこととなる。東京市社会局年報には「中産階級の転落を防ぐ市民館事業の体系なる、強化福利に力を注ぐ」として、各種の教育教化事業や経済福祉事業(貯蓄組合など)、体育保健、相談指導、慰安娯楽、各種クラブなどを市民

館の事業計画とした。こういった流れは、大恐慌を契機として社会保障を充実強化していった英米と違い、妨貧を単なる精神主義（＝教化）で補おうとする日本の不合理性を良く表していると一番ヶ瀬は指摘している。さらに戦時体制へと突入していくにつれ、市民館の役割として「戦争の背後をささえ、国策が円滑にはこばれるよう国民の精神的統一をはかり、節儉と勤労に努めることにより報恩・報国をなすよう国民を督励する」機能が加わる。それと同時に事業内容も、「母子保健」「保健衛生」「栄養指導」「配給」「結婚奨励・相談」「援護相談」といったものへと変化していく。この時期、民間セトルメントも、元々その大半はアメリカの社会事業のデパートメント・ストアであったが、思想弾圧や労働運動弾圧が強まる中で、益々サービス事業の提供に特化する傾向を強めた。

これらを踏まえ一番ヶ瀬は、わが国のセトルメント史を以下のように総括している。「日本において、英国流の社会教育的セトルメントは学生セトルメントの流れに、一方、米国流の社会事業的なそれは、まことに形体的ではあったが、民間および公立のものに受け継がれていった」。さらには、民間・公立セトルメントは、「本来的にはセトルメントではなく「まったく無関係に並存していた」とし、そのため「日本における社会事業あるいは社会福祉の成立に、セトルメント活動は、内在的な力を与えることなく終わってしまったといえ」、それが「今日いまだに根強く残存している社会事業や社会福祉の「慈善的な性格」「非民主的性格」の要因のひとつであることというまでもない」と、セトルメントの価値や精神が日本には定着せず形を変えてしまったことを惜んでいる。

一番ヶ瀬は同論文において、音田のいう「第4期（戦後の再生期）」については全く言及していない。現実にも、セトルメントは一部公立セトルメントが残存しとを除外すれば、殆どが解体してしまっていた。英国流の社会教育的セトルメントは文部行政下の社会教育に、米国流で戦時下において拡大した社会事業的セトルメントは社会福祉協議会へと分断され継承されていくこととなる¹⁵。このように、社会教育と社会事業が分断されたことによって、戦後わが国の社会事業のありように、「主体形成」という価値・理念が抜け落ちてしまったのではないかと一番ヶ瀬は指摘する。一番ヶ瀬は「社会福祉の社会教育」（『月間社会教育』1973年9月 No.190）において、住民一般や社会福祉の援助対象となりうる人々の生活設計が曖昧で、社会福祉制度に対する知識や利用方法も極めて低いことを調査によって明らかにした。その背景として、社会教育や学校教育が、人権感覚と福祉制度と問題解決意欲の涵養に、充分貢献してきていなかったことが大きな原因ではないかと指摘している。さらには、社会福祉には市民参加・利用者参加あるいは従事者参加が重要であるという立場から、社会教育が社会福祉の正しい認識をどう広げ深めていくかということが大切になるとしている。社会福祉において教育的機能は、市民・利用者あるいは従事者が参加し政策への正しい認識と批判をもつ上できわめて重要であると指摘している。また、一番ヶ瀬は、『現代社会福祉論』（一番ヶ瀬康子著 時潮社 1971）の中で、「社会福祉への認識は、なによりも客体的であり主体的な存在そのものである「歴史的社会的現実」

への認識として深められなければならないと私は考えている。何故ならば、それはまさに「他人事ごとではない」社会福祉問題を心情的感性的認識にとどまらず、理性的科学的認識を媒介として止揚することにより、その伝統的な実践的視点を、現代では運動論として展開する必然性があると考える」¹⁶としている。

3 セツルメント実践・隣保事業の評価 ～ソーシャルワークの視点から～

(1) セツルメントの目標と特徴

セツルメントは、産業革命以降の近代資本主義の進展に伴い労働者問題即貧困問題が深刻な様相を呈してきたことを受け、ボランティアとして始まった援助活動である。当時の西欧社会は、自由放任の経済論理が支配的で、貧困は個人の責任であるという理由から貧民に対して積極的な公的施策はとられず、貧困者や貧民街が社会的に阻害された状態であった。一方で、篤志家による活動はあり、COSのようにその組織化もなされるようになっていたが、これらの援助活動は宗教的慈善もしくはパターナリズム的な慈善であり、対症療法的な救済策が中心であった。

こうした中、セツルメントは中産階級者の理想主義・ヒューマニズム・隣人愛に基づく活動として模索され始めた。その活動の目標は、貧困の一時的な癒しではなく、貧困からの脱却を目指しその力を付与する主体形成支援であった。その具体的実践内容は前述のとおりであるが、その特徴を音田正巳は「我国セツルメント事業の解雇と展望」（「社会福祉研究」第8巻第2号）において以下のようにまとめている。第一に個人と地域両方へ働きかける点である。セツルメントは、対象者を施設に保護してこれを救済し教育するものではない。自分の方から問題の地域へ進出していき、そこに定着して、貧民の救済強化に従事するものである。また、個人を個人として救済教化するのみではなく、個人によって構成されている地域を救済教化の対象にするものである。第二にはアウトリーチないしは現場主義を重視している点である。セツルメントという名称からわかるように、知識階級が観念的に貧困問題を捉え救済・施与を行うのではなく、その中に定住し、現実の貧困、犯罪、頽廃、コミュニティ崩壊の中で人間関係を復活し隣人愛と社会連帯を芽生えさせる活動である。第三は、セツルメントの事業内容・標的は、地域の問題に応じて変化するものであって、決して一定不変のものではないという点である。セツルメント毎に事業内容は異なるし、一つのセツルメントも時代と共にその事業を転換してきている。

(2) セツルメントにおける主体形成のソーシャルワーク実践

セツルメントは、労働者教育の系譜と貧民教化事業の系譜が結実したものであると先述したが、労働者教育事業の実践としては、モーリス（Frederick Denison Maurice）による1854年のロンドン労働者大学設立や、1873年のケンブリッジ大学シュアート教授（James Stuart）による大学延長講座開講などが代表的なものとして挙げられている。そし

て、教会による貧民教化事業としては、デニソン牧師 (Edward Denison) のロンドンイーストエンドの聖フィリップ教会における教化実践などがある。これらの実践を継承・発展する形で、1872年にイーストエンド地区ホワイトチャペル街のユダヤ教会牧師となったバーネット (Samuel Barnett) が1884年にオックスフォード大学関係者の協力によりトインビーホールが設立し、これが世界最初のセツルメントといわれている。

これらの特徴を持つセツルメントは、大正期に我が国紹介され、隣保事業として普及することとなる。しかしながら、我が国におけるセツルメントは、農村における地主の封建的搾取、強い家族主義と弱い社会連帯観が影響し、欧米とは違う独特のセツルメントの発展を遂げているのも特徴である。その特徴の表れが公立隣保館という運営形態である。公立セツルメントは、西欧的見解からすれば特異な運営形式であるが、日本人の社会連帯の観念の乏しさや、社会政策の代替手段としてセツルメントを位置づけた政府・地方行政の意図も強く働いたものといえる。

大林は、こうした労働者階級の家族生活に脅威を与え解体に導くような社会制度である資本家的搾取制度と公立で運営されるセツルメントのような救済施設のありようを「飴を嘗めさせて棒で撲りつけているようなもの」と表現している。つまり、日本型セツルメントの最大の特徴は「公立隣保館による物質的補給」に偏ったものであるといえよう。同様の分析を音田や一番ヶ瀬も指摘していることである。

大正後期から昭和初期に急速に拡大した我が国セツルメントは、その進歩的民主的思想に立脚するが故に、1930年代の世界恐慌による資本主義の危機以降、我が国が全体主義的傾向を強める中で、萎縮を余儀なくされる。さらに、戦後はセツルメントが、社会教育行政と福祉行政に分断させられ公民館と社会福祉協議会の実践に縮小させられたことにより、その精神が忘れられ、人的物的な資源の有効な動員ができなくなってしまった。

個々のセツルメントによって事業活動に特徴があるものの、我が国最初のセツルメントの一つとされている A.P. アダムスの岡山博愛会のセツルメント活動では、女史自ら家庭訪問を重ね、個別援助を展開している。セツルメント運動は一見、教化を行う学校のように捉えられるが、その実は、総合的社会事業施設でもある。ハル・ハウスでも、地域住民に対する訪問・相談・保護といったアウトリーチ活動も多く行われていた記録や、少年労働、労働者生活実態、結核防止など各種のニーズ調査が行われた記録があり、セツルメントが在宅福祉サービス拠点であったとともに地域を基盤としたソーシャルワーク展開の中心拠点としての機能を果たしてきたと見ることができる。

地域を基盤としたソーシャルワーク実践とは、地域住民の抱える生活問題の発見・アセスメント・援助計画・サービスマネジメント・実施・評価といった解決対応を図る個別的援助過程と並行して、地域資源開発・動員 (community care)、機関間連携 (community organization)、自助的地域生活環境改善 (community development)、住民参加による計画策定 (social/community planning)、⑤地域住民の教育 (community education)、代弁的・

直接的なソーシャルアクション (Community action) などに取り組む実践である。セツルメント実践におけるこれらの機能を分析すると、セツルメントは具体的な各種サービスを持ちながら、そこにいる舎監などが中心となり伴走者の立場で相談助言にのり、経済、就労、教育、健康、衛生等の問題に個別に対応していくとともに、これらサービスの利用者の組織化を進め、またさまざまなクラブ活動を通じた地域住民諸階層の組織化をはかり、それらを訪問活動等援助活動にもつなげているといえる。さらには、問題に気づき、その解決への意志を高める主体形成のための教育的な働きかけも行っている。

このように考えると、セツルメントは、地域ケアシステムの扇要機関として、保健・福祉・教育サービスが統合したような機能を併せ持ち、さらには、ニーズに柔軟に対応したプログラムを開発したり個別生活問題に対応するソーシャルワーク機能を持った拠点施設でもあったといえるであろう。

おわりに

大橋謙策は、社会福祉の主体形成のために、社会事業における教育的機能の重要性を訴える。その際、主体的に教育を享受できる人々ではなく、社会福祉の対象となる人々への社会教育のアウトリーチが問われるとしている。同様のことは大正期に方面委員制度創設に携わった小河滋次郎も「救貧は教育であり、対象者の自信、自助、自尊の精神を傷つけざると共に彼の市民としての、公民として、国民の一人としての人格を尊重保全し、救済の必要なからしむべく、一日も早く自らその運命を回転向上するに至らしめんことを努むるのが救貧事業の使命であり本領である」と指摘している。

英国に始まったセツルメント実践は、貧困からの脱出を施与によるのではなく自立によってなすことを目標としていた労働者教育の視点において、それまでの COS 実践とは大きく異なる特徴であるといえよう。また、セツルメントの世界的拡大の中で、在宅サービスの拠点機能や地域住民全体に向けた主体形成 (社会教育) の拠点機能も培い、ひいてはコミュニティオーガニゼーション機能を併せ持ち展開するなど、今日風に言えば「地域福祉の中心的機関」に機能充実・機能拡大していったといえる。こうしたセツルメントが、今日の社会福祉実践にどう繋がるのか、また、我が国におけるセツルメント実践が戦後どのように公民館と社会福祉協議会に分断・継承されていったかの経緯については今後の研究課題としたい。

参考文献

1. 日本地域福祉学会地域福祉史研究会編『地域福祉史序説』中央法規 1993
2. 大林宗嗣著『セツルメントの研究』東京・同人社 1926

※本書については日本図書センターによる『戦前期社会事業基本文献集 30』掲載の復刻版を使用

3. シンコーヴィッチ女史著／池川清・岡村重夫訳『アメリカに於ける隣保事業』
日本社会事業協会 1949
4. 音田正巳「わが国のセツルメント事業の回顧と展望」
(大阪社会事業短期大学社会問題研究会『社会問題研究』第8巻第2号 1958)
5. 三好豊太郎著『隣保事業の本質と内容』基督教出版社版 1936
6. 『セツルメントの精神とその組織』王子隣保館 1924
7. 柴田善守著『小河滋次郎の社会事業思想』日本生命済生会 1964
8. 一番ヶ瀬康子「日本セツルメント史素描」(『日本女子大学紀要』第13巻 1964)
9. 一番ヶ瀬康子著『現代社会福祉論』時潮社 1971
10. 大橋献策著『地域福祉の展開と福祉教育』全社協 1986

《文末注》

- 1 大林宗嗣著『セツルメントの研究』東京・同人社 1926（本書については日本図書センターによる『戦前期社会事業基本文献集 30』掲載の復刻版を使用） p.64
- 2 同書 p.66
- 3 同書 pp.63-70
- 4 同書 pp.98-99
- 5 同書 p.101
- 6 同書 p.105
- 7 ジーン・ファイン (Jean Fine) 女史によるフォーサイス街での隣友組合、ニューヨーク市内の女子大代表者によるリヴィントン街での「女史に対する大学セツルメント」等が代表的。
- 8 同書 p.151
- 9 同書 p.154
- 10 同書 pp.112-113
- 11 同書 p.156
- 12 同書 p.193
- 13 同書 p.211
- 14 音田正巳「わが国のセツルメント事業の回顧と展望」(大阪社会事業短期大学社会問題研究会『社会問題研究』第8巻第2号 1958)
- 15 一番ヶ瀬は「日本セツルメント史素描」(『日本女子大学紀要』第13巻 1964)において、「英国のセツルメント活動は、その社会教育的活動を通じ、労働者の自主的な下からの連帯主義のもりあがりを援助する作業をはたし、社会事業、社会福祉の思想的基盤の形成を促進」と評価し、一方で、アメリカでは「つねに流動する住民の生活要求に、ただちに、しかも直接こたえざるをえない状況、すなわち生活問題の基本的対

策への志向よりは、窓口的業務や即時的な生活問題対策である社会施設の附与という方向へ発展」したと特徴付けた。特に、アメリカでは、コミュニティオーガニゼーションを行うコミュニティセンターのように単に機能的に受け止められてきている。この整理を単純化すれば「英国型セトルメント＝社会教育機関／米国型セトルメント＝社会福祉機関」と整理できよう。両者は起源と名称は同じでも、それぞれの社会状況のなかで大きく違ったものとして発展・機能してきたといえる、と整理している。

16 一番ヶ瀬康子著『現代社会福祉論』時潮社 1971 pp.58-59